

# モンゴル族の喫茶文化の考察と研究

Consideration and study on the tea culture of Mongol

趙 方任<sup>1</sup>, ウリジバヤル<sup>2</sup>  
Fangren Zhao<sup>1</sup>, Wulijibayaer<sup>2</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学国際センター, <sup>2</sup>新潟産業大学経済学部経済学科

キーワード: 蒙古族, 茶, 习俗  
Key words: Mongolian, Tea, Customs

## 1. 研究目的

中国の茶産区は南部,あるいは東南部に集中しているのに対して,モンゴル民族の居住区である内蒙古自治区はまったく茶を産出していない。しかし,中国で一人当たりの平均茶消費量でトップを誇る地区は福建,雲南,安徽や台湾のいずれかの有名な茶産区ではなく,この内蒙古自治区である。モンゴル族は有名な「奶茶」(ミルク茶)を毎日欠かさず飲む習慣こそが,一人当たりの平均茶消費量をトップにした理由だとも言われている。

また,この「奶茶」はいろんな食品を入れて飲むという特徴を持ち,世界でも稀に見る添加茶(茶の湯に食品を添加して喫す),あるいは「食べる茶」の代表格にも挙げられている。しかし,このような多彩的,個性的なモンゴル喫茶について,その研究がほとんど行われていないのが現状である。

モンゴル族茶文化研究において,以下数点の課題が浮かび上がる。

(1)「奶茶」以外の喫茶方法についての調査も研究も見当たらず,モンゴル族喫茶の全体図が見えてこない。

(2)「奶茶」は中国で知名度が高いものの,その特徴などについての分析と研究が見当たらない。

(3)モンゴル喫茶の歴史に関する研究が見当たらないのみではなく,文献史料の本格的収集も行われていない。

中国の喫茶歴史研究において,今までの研究は王玲『中国茶文化』のように中国「元代」の茶文化を「宋代」に付随して語るか,あるいは「元代」をスルーして,宋代から直接明代へと「元代」抜きで語っている。周知の通り,中国「元代」は短い王朝だが,モンゴル族による政権である。元代の喫茶文化と今のモンゴル族の喫茶習慣との関連

性研究が行われていないことはむしろ不思議に思う程である。その理由に関する分析資料が見当たらないものの,以下のように推測できる。

1. 短命王朝の元代に新しい喫茶法が出て来なかったのも,前王朝の宋代に付随させた。

2. モンゴル族は少数民族のため,その喫茶法が主流扱いされなかった。

3. モンゴル「奶茶」に代表されるように,茶に他の食品を添加する喫茶法は中国茶文化の歴史において主流ではないし,重視されていない。

本研究は「少数民族」「非主流」など中国研究者に重視されていない中国の文献史料を総合的に研究し,さらに,現地調査の方法を用いて,「元代茶文化と今のモンゴル族喫茶習慣との関連性」を究明し,モンゴル族喫茶文化の全体図を明らかにするのを目的とした。

## 2. 研究実施内容

本研究の代表者と共同研究者は中国内蒙古自治区シリンホト市阿爾善牧場区,烏日圖牧場区,正藍旗上都鎮及びその周辺牧場区,西烏旗所在地及びその周辺牧場区,赤峰市達里諾爾湖牧場区など,シリンホト市を中心とする6地区とモンゴル国ウランバートル市を訪れ,現地調査を行い,モンゴル族の喫茶文化の構造及びその特徴を究明した。また,唐代,宋代の茶詩史料を中心に文献分析を行い,宋代末期と元代初期のモンゴル族喫茶の歴史について研究した。

本研究の研究結果は凡そ以下の二点になる。

一,モンゴル茶の構造について。

従来の「添加食品の名前」でモンゴル茶を分類する方法の欠陥を指摘し,初めて「食品を添加する回数」で分類すべきという概念を提起し,その

上、モンゴル茶を5種類に分類した。この新しい分類法によって、全体的にモンゴル茶の構造を把握することが初めてできるようになった。

二、モンゴルの歴史、特にその起源について。

本研究は現地調査の結果と史料を比較する方法を以て、「モンゴル族の喫茶習慣がチベットから伝来した」という従来の説を否定し、その上で、以下の三つの結論を出した。

(1) 1206年モンゴル帝国が建国した前後、モンゴル族はすでに喫茶文化に触れ、そして、南へ侵攻する過程で、以前の遼、金、西夏諸国の地域の、中国の南宋王朝で所謂“北方”地域の「乳製品などの多重添加」喫茶文化を受け入れた。

(2) 14世紀に著された『飲膳正要』の記録などによると、モンゴル族の喫茶習慣は一定程度の発展と普及を遂げた。

(3) 16世紀にチベットのラマ教の伝教に伴い、モンゴル族に喫茶習慣が広く普及した。

そして、モンゴル族の喫茶歴史は中国黄河流域における喫茶の普及とまったく同じ道を歩いたと分かる。

また、モンゴル族を含む諸少数民族は文化記録に長じず、喫茶に関する文字史料がほとんど残っていない。一方、生活文化を固く守り、伝承していく性格が強い。つまり、諸少数民族の伝統茶文化は現代生活喫茶にあるのに、茶文化研究者に見落とされ、重視されていない。そして、「添加茶」は「非主流」とはいえ、記録を得意とする漢民族の史料に少ないものの残っているが、やはり「非主流」のため、茶文化研究者に重視されていない傾向が頗る強い。この現状を踏まえ、本研究は「文献史料と現地実態調査の相互検証」手法で展開していき、漢民族の史料と少数民族の現在喫茶状況調査の結果と合わせて研究して、相互検証を行い、諸民族添加茶文化の歴史像を描いた。この手法によって、漢民族と少数民族学者のそれぞれの不足を補うことができ、また学界の現場調査軽視の欠点を補うこともできた。

つまり、「文献史料と現地実態調査の相互検証」手法の有効性を証明した。その実例を2つ紹介しよう。

「北方俚人茗飲無不有」と「琉璃眼」は共に茶

詩に出てきた「添加茶」に関する記述だが、文字だけではその実態はどちらも不明瞭で難解である。しかし、下記のモンゴル人の日常喫茶の実際の写真を見れば、一目瞭然と言えるほどの可視性を以て茶詩の解読ができるのである。



写真1、「北方俚人茗飲無不有」（北方俚人茗飲に無いものがない）



写真2、「琉璃眼」

### 3. まとめと今後の課題

モンゴル族の喫茶文化の構造及びその起源を究明したものの、中国には同じ「添加茶」喫茶習慣を有する少数民族がまた数多くある。さらに世界に目を向けば、ウズベキスタン、トルコ、イラン、イギリスなどを代表とする中央アジア、西アジア、北アフリカ、欧米諸国で茶にほかの飲食品を入れる「添加茶」喫茶法も広がっている。その源はモンゴル族をはじめとする中国の添加茶文化圏にある。

中国の諸少数民族の添加茶とモンゴル族の添加茶喫茶文化の異同について、そして中国の添加茶文化圏の形成及び世界のほかの地域への伝播についての研究はこれからの課題になる。これらの研究、特に世界への伝播に関する研究は世界茶文化史の空白を埋めるのに期待できる。

#### 4. この助成による発表論文等

##### ①雑誌論文

- [1] 趙方任・ウリジバヤル・常宏, 「中国蒙古族饮茶习俗研究」, 大妻女子大学『人間生活文化研究』, 査読無, No.29, 2019, pp.819-836.
- [2] 趙方任, 「唐宋時代「添加茶」文化研究」, 大妻女子大学『人間生活文化研究』, 査読無, No.29, 2019, pp.548-562.
- [3] 趙方任, 「唐宋時代之「花茶」文化分析」, 大妻女子大学『人間生活文化研究』, 査読無, No.29, 2019, pp.563-572.

##### ②Web サイト

- [1] 趙方任・ウリジバヤル・常宏, 「乳と茶とモンゴルの奶茶文化①」, 「オルタ広場」 「コラム」中国単信, 査読無, 21号, 2020.
- [2] 趙方任・ウリジバヤル・常宏, 「乳と茶とモンゴルの奶茶文化②モンゴル族の「早茶」文化」, 「オルタ広場」 「コラム」中国単信, 査読無, 22号, 2020.
- [3] 趙方任・ウリジバヤル・常宏, 「乳と茶とモンゴルの奶茶文化③モンゴル族の「鍋茶」文化」, 「オルタ広場」 「コラム」中国単信, 査読無, 23号, 2020.